

○「小都市社会を明るくする運動作文コンテスト」受賞作文

「第17回小都市“社会を明るくする運動”作文コンテストで6年生のO・Sさんが最優秀賞を、同じく6年生のD・Kさんが奨励賞を受賞しました。おめでとうございます。

その表彰式が、今月10日(水)に行われました。二人には、小都市の加地市長から表彰状を手渡していただきました。さらに、表彰式後には、O・Sさんが大勢の方々の前で最優秀賞を受賞した作文を発表しました。正面を向いて、立派な態度の発表でした。次号では、奨励賞のD・Kさんの作文を紹介いたします。



感じたことから

思いやって助け合う

麻生学園小学校 六年 O・S

ぼくは、この作文を書く時、先生の言葉を思い出した。

国語の授業で、先生が、犯罪・非行はどうしておこるのか考えてくださいと言われた。ふと、クラスメイトにたたかれ、思わずたき返したことを思い出した。同級生にたたかれたり、ばかにされたりして、やめてほしいと訴えても聞いてくれず毎日のように続いたことがあった。たえきれなくなつてぼくもたたいてしまった。でも、ぼくだけ先生に怒られ謝らなければいけなくなり、くやしい気持ちになつた。それまでぼくは、心の弱い人や心に余ゆうのない人が犯罪や非行に走るのではないかと思っていた。しかし、このことから、いくら心に余ゆがあつても、何度も暴力やいやがらせをされたら怒りが爆発してやり返してしまう。そして、自分だけ悪者にされ、他の人から信頼されなくなり、独りになっていき、反省したと言っても、信用がないので誰も信じてくれない。もし、ぼくがやめてと言つた時に相手がぼくの思いを聞いてくれていたら、けんかは無かつたかもしれない。

平和で、犯罪・非行のない社会が一番なのだ。そんな社会を作るためには、思いやりやコミュニケーションが大事だ。これらを大切にすれば、犯罪や非行を防ぐことができるのではないか。このことに気付いたのは思いやりが何より大事だと思った経験があるからだ。

ぼくの妹は知的障害と自閉スペクトラム症という障害を持つ。妹にたくさんの経験をして欲しいという母の思いから、一緒に買い物に行ったり、遊園地へも出かけたりしている。妹は四年生だが、発達年齢は四才くらいだ。思い通りにならないと大きな声で叫んだりする。そんな時、周りの人たちはうるさいなという視線をぼくたちに向けてくる。でもぼくたち家族にとって妹の行動はいつもことで慣れている。それはぼくたちが妹のことを分かっているから、何とも思わないのだ。しかし、周りの人たちは妹の障害のことを知らないし、どうして大きな声を出しているのか、理由がわからないから迷惑に感じるのだろう。

ぼくは、妹のことを通して、人を見る時に表面的な姿だけで判断するのではなく、なぜそのような行動をするのか、相手の立場に立って考えるように心がけている。さらに、相手のことを知るには、遠くからながめて、いろいろ想像するだけでなく、直接ふれ合うことが大切だと思う。そうすることで、決めつけることなく、より相手を理解し、心と心を通い合わせができると思う。共に過ごすことで、決めつけることなく、その人らしさを知り、心を通じ合わせができる。知らない人に対して、自分から声をかけ、関わることは簡単なことではないし、自信もない。しかし、まずは身近な人に接する時に、相手の立場に立って、気持ちを考え、できるだけ安心し、明るい気持ちでいてもらえるようにしていきたい。

犯罪や非行に走る人に対しても、その気持ちを聞いてあげたり、その人たちの立場や気持ちになって思いやりをもって接したりば、犯罪や非行自体も減っていく、明るい社会になっていくと思う。